

# 『仏教大辞典』と金尾文淵堂

石 塚 純 一

仏教辞典といえば、望月信亨編『仏教大辞典』全一〇巻（昭和十一年・五巻本、昭和三八年・一〇巻増訂版）と、織田得能『仏教大辞典』全一卷（大正六年、大倉書店）の二編が、長いあいだ双璧と謳われてきた。その他、宗門大学の編集になるものなどがあり、現在では中村元監修の『仏教語大辞典』全三巻（昭和五〇年、東京書籍）などが出版され、都合四〇種類以上の仏教辞典が刊行されてきた。中でも最も詳細、かつ学的な価値が高いといわれ、後の仏教辞典に模範とされたものがここで採り上げる望月信亨編の『仏教大辞典』、通称「望月仏教大辞典」である。<sup>\*1</sup>

世に長期にわたり苦心惨憺してようやく編纂が成った著名な出版物はいくつもあるが、大修館の諸橋轍次『大漢和辞典』と並び難産だったのが、この望月仏教大辞典である。この辞典が刊行される経緯については、本辞典の望月信亨の自序に詳しい。以下では、この自序に依りながら、私がこれまで論じて来た出版者金尾文淵堂と本仏教辞典との接点にどのような問題が横たわるのかを考察し、大正・昭和初期に『大日本仏教全書』（大正元―大正一一）、

『大正新脩大藏經』（大正二―昭和九）などの大規模な仏教書が集中して出版された背景についても考えてみたい。

『仏教大辞典』刊行までのいきさつ

望月信亨（一八六八―一九四八）は、昭和一一年に完結した『仏教大辞典』の自序で次のように述べる。

仏教大辞典は当初編纂に着手してより、前後滿三十年の星霜を閲し、今や漸く其の完成を見るに至れり。回顧するに明治三十九年書肆金尾種次郎氏は、文学博士鈴木暢幸氏に日本文学中に現はれたる仏教の術語辞典を編纂せんことを依頼し、氏は東京下谷桜木町の宅に於て其の編纂を企て、時々予の許にも来遊せられたることあり。同年秋金尾氏は予約募集を行はんが為に同氏に見本を作らんことを乞ひ、且つ予に見本所載の術語の寄稿を依頼されたるにより、余は之を肯諾せり、是れ予が本辞典と關係を結びし始なり。蓋し最初は四六版数百頁の単なる小辞典発行の予定なりしが如きも、予が關係するに及び、協議の結果、其の計画を拡大して四六倍版約一千五百頁の大辞典を編纂し、別に付録として仏教大年表二三頁のものを出版することとし、<sup>\*2</sup>（後略）

この企画は金尾文淵堂が当初、「日本文学に現われたる仏教語」の理解のために辞典を作りたいと持ちかけたことから始まった。明治三十九年ころのこととある。<sup>\*3</sup>四六判一卷ものの小辞典の予定だったが、望月が編集をはじめてしばらくすると彼は規模の拡大を主張し、企画は四六倍判・一五〇〇頁の大部一卷と付録仏教大年表の二冊に変更された。明治四〇年七月の刊行予定は変更せず完成を期して、同年二月に金尾種次郎（一八七九―一九四七）は麹町

富士見亭に大晚餐会を催し、一〇〇名を越える執筆者等を招待して速成の方針を伝えた。

しかし、計画はさらに大幅に変更されることになった。集まった数千の原稿を前にして望月が編集上の問題に気づいたからであった。原稿は内容の粗密がはなだしく、「簡にして義を尽さず、重複あり矛盾あり、文体も区々にして一定するところなく」（望月自序）、インド以来二千数百年間の仏教のあらゆる事項を網羅し、明快な解説内容をもつ辞典を作るためには速成できないことが明らかになった。「予は当初深く此等の事を思はず、無造作に本辞典の編纂を引受け、而も僅々七八箇月間に之が速成を約したるは、全く其業に対し無経験なりしが為にして、甚だ軽率の挙たり」（同自序）と反省するが、金尾文淵堂にとっては打撃である。明治四〇年初から各誌上で仏教辞典の広告を開始し予約募集の結果、多くの予約が集まった。予約金は速成を期した編集のための費用として使われ、刊行予定日近くなつての方針の大転換、刊行の延期は出版者にとっては大ピンチであった。七月を過ぎて新聞で刊行の延期を読者に伝えたが、季節が秋になつて予約者の不信任は募る。明治四一年一〇月七日の『万朝報』が文淵堂の窮状を伝えるように、たしかに急速に資金状況は悪化していった。<sup>\*6</sup>

予約金の返金を要求されれば応えなければならず、編集作業を進めれば原稿料その他の費用がかさむ。著者と金尾文淵堂との交渉は続いたが、軍資金不足はいかんともし難く、かといって編者望月信亨は編纂を止めるわけにもいかず、自ら借金をして急を弁じる。金尾も金策に走るがとうとう不渡りを出して金尾文淵堂は倒産してしまう。<sup>\*7</sup>結局のところ、金尾種次郎は出版者武揚堂の小島棟吉に仏教大辞典の版權を譲り、借金の形代わりをしてもらいこの仕事から下りた。

その後、望月信亨は仕事を引き継いだ武揚堂に刊行を迫られて、明治四二年三月ついに第一巻を発刊した。おそ

らく第一巻の大半は金尾文淵堂時代にすでに組み版が出来ていたと思われる（武揚堂もある程度形が見えなければ版權を買うはずがないからである）。この明治四二年版には望月の序文も無く、「はしがき」という名の凡例からはじまり（先の自序は昭和一年の完成時のもの）、かなりあわてて発刊に踏み切った様子がうかがわれる。しかし、扉の書名、ロゴタイプや組み体裁・図版の入れ方は金尾文淵堂の広告の見本どおりで、また昭和一年の完成時の版とも変わらない。さて、第一巻は刊行したがその後が続かない。苦肉の作として資金回収を早めるために「仏教大年表」一巻を同年の十二月に刊行した。「仏教大年表」も金尾文淵堂時代に編集が進んでいたと思われる。なぜならこの年表は現行の望月仏教大辞典にも付属するが、明治四〇年二月発行の雑誌『宗教界』に載る金尾文淵堂の広告にみえる「大年表見本」と基本的に同じ体裁で、大きなポリウムにもかかわらずわずかな期間で刊行できたからである（図参照）。仏教大年表は四六倍判・六五〇頁、印度・中国・日本を三段組に並べ同時代進行の形式をとり、年表項目の詳細な記述にはすべて「出典」が示され、出典とされた参考経典・書目類の数は実に一一〇〇点を越える。望月信亨らがこの辞典編纂のために基礎資料として集め参照した文献の量が中途半端な数でなかったことがわかるとともに、第一巻刊行の後、数ヶ月で大年表を刊行できたのは金尾文淵堂時代から準備が進められていたことを物語っている。本造りのアイディアに長け、刊行の困難を予測した金尾種次郎が仏教年表の制作を辞典編集と並行していたことは間違いない。

武揚堂から第二巻が刊行されたのは明治四四年九月、第三巻は大正五年十二月と数年に一冊のペースでの発刊となった。これでは気の長い読者でもたまったものではない。出版者（武揚堂）は内容のいかんを問わず編纂の完了を迫るが、望月は最低限の内容の充実を譲らない。両者の立場が一致せずまた暗礁に乗り上げた。このころ望月は

文學博士	南條文雄先生	文學博士	望月信亨先生
文學博士	村上專精先生	文學博士	萩原雲來先生
文學博士	前田慧雲先生	文學士	鈴木暢幸先生
文學博士	高橋田次郎先生	文學士	加藤玄智先生
	序文		共編

◎定價金拾五圓 豫約締切 四十年二月十日 製本出來 四十年七月

甲種金六圓	(四十一年二月十日迄に申込金壹圓)	市内地金五十五號
乙種金七圓	(自二月至七月毎に申込金壹圓)	清露寺灣金六十號
丙種金八圓	(自二月至七月毎に申込金壹圓)	振替貯金番號 三八一七

本 書	四六倍判大號活字三段紙數壹千五百頁製本堅牢極美
の	插畫各種製版六百有餘語數約三萬精細圖索引其他
林 裁	附錄 佛教大年表並極彩色木版摺密畫其他數十葉附

發行的主旨

[illegible][illegible]

精細なる見本

御抄巻六終封入

發行並豫約申込所 東京市京橋區五郎兵衛町貳拾貳番地 金尾文淵堂

『仏教大辞典』と金尾文淵堂

本 見 典 辭 大 教 佛 (六)

[illegible]

43

浄土宗執綱職に就き（明治四四）多忙を極めたことも影響している。

望月信亨はこの事態について友人の大村西崖（東洋美術史家、東京美術学校教授）に相談したところ、日本人の手になる重要な仏教書を逐次刊行し、資金を作ったかどうかと言われ「大日本仏教全書」の刊行を企てた。これによって資金の融通が付き、さらに仏教辞典編集の参考書としても役立つ、一挙兩得と考えたのだ。多くの知り合いの学者を動員して出資も依頼、大正元年五月から毎月菊判五〇〇頁の書二冊を刊行していった。大正一一年に完結した『大日本仏教全書』全一五〇冊はこのような経緯で生まれ、『覚禪鈔』などの未公開の希覯本を多く収め、仏教のみならず文学・史学・美術の研究にも寄与する全集となった。<sup>\*9</sup>

しかし、仏教大辞典の編集は大正五年の段階でついに中断してしまう。四巻の一部は脱稿したが、その先の見通しがつかず、全巻完結までにはさらに多くの歳月と巨額の資金を必要とすることが明らかとなったからである。武揚堂も手を引き、以後一〇年間頓挫する。再開されたのは、大正一五年に至り財団法人啓明会（理事長は侯爵大久保利武）が編纂補助金を出すことになったため、同時に仏教大辞典編纂後援会も結成、新たな執筆陣を加わえて、望月は編集作業を改めて開始した。

そして昭和六年十一月、ついに新版第一巻一千頁を刊行（発行は、「望月博士 仏教大辞典発行所」）。明治四二年に刊行した第一巻から第三巻までの武揚堂版は、刊行から二〇年も経ち内容的にも不満が残るとされて全面改訂することになった。以後ほぼ毎年一巻ずつ刊行し、昭和一一年八月に全五巻を完結したのである（現在の発行所は世界聖典刊行協会）。東京朝日新聞は「地獄の部屋に三十年、生れ出た極楽の書」との見出しで完成を報じ、一月に東京会館で開かれた祝いの席で望月は涙したという。<sup>\*10</sup> その悪戦苦闘の三〇年が異例に長い本書の自序に述べられて

いるのである。

本辞典の編纂及び発行の経過大略斯の如し。之を要するに明治三十九年金尾種次郎氏の発願によりて本辞典の編纂は開始せられ、次いで予其の編纂を担当することとなり、後幾多の事情の為に金尾氏退き、小島氏退き、遂に予自ら印刷発行の責務までも荷はざるべからざるに到り、其の間具に辛酸を嘗め、時に或は誹謗を被り、或は誤解を受けしことも少なからず。嗚呼悪戦苦闘滿三十年、端なく後半生を其業の為に捧げ、白雪頭に盈ち、齡將に古希に幾からんとして辛うじて宿志を達するを得たり。今に於て過去を顧みて実に感慨無量なるものあり。惟ふに辞典の編纂は至難の業にして、實際之に従事したるものの外、艱苦の度を知るを得ず。（望月自序）

望月信亨はこの辞典のために妻の実家が持つ京都知恩院前の家作を売って借金返済に充てるなど自ら犠牲を払い、また自宅を編集室として若い学者を集めて作業をさせ、すべての原稿に自ら眼を通し、学者として妥協を潔しとせず納得のいく辞典編纂の姿勢を貫いた。この業績は長く称えられ、いまでもこの辞典は「望月仏教大辞典」とその名を冠して呼ばれる。その影にかすみ消えかかっているのが、辞典の刊行を発案し、持てる資金をすべてつぎ込んで失敗した出版者金尾文淵堂である。

#### 金尾文淵堂の明治四〇年

この間の経緯を金尾文淵堂の側から追ってみよう。前稿で述べたように、金尾文淵堂は明治三八年の初めに大阪

から東京へ出て、神田で出版社を開き活発な活動を開始する。翌三九年の年間発行点数は三三点、四〇年には二八  
点と文淵堂の歴史の中でも最多の書籍発行点数を記録する。社員も数名雇い、三宅雪嶺『日本及日本人』の発行元  
にもなり、木下尚江の新聞小説や堺利彦の『婦人問題』などを発行、平民社にも接近したことは既に述べたとおり  
である。<sup>\*12</sup> 薄田泣菫の『白羊宮』、与謝野晶子の歌集、『早稲田文学』の再刊など文学関係の出版にも積極的な姿勢が  
目立つ。このまま進めば出版社として成功するかと思われたところで、「仏教大辞典」の躰きである。明治四十一年の  
発行点数はわずかに五点、「仏教大辞典」の予約金と刊行遅延問題等で先へも進めず、後にも引けない状況に追い込  
まれてしまう。

企画を立ち上げる時点での見通しこそ悪かったが、金尾が望月に持ちかけた企画は、そもそも「文学に表われた  
る仏教語小辞典」だったのだから、すべての責任を金尾の側だけに負わせることはできないだろう。金尾文淵堂は  
編者のこだわりと方針変更によって窮地に陥った。しかし、金尾種次郎は望月信亨の方針変更を理解してできるかぎ  
りの協力を惜しまなかった。一般に辞典の編集は時間と労力と資金の計画を綿密に立てなければスタートできない。  
また編集方針の途中変更、つまり小項目辞典を改め大項目主義への転換は、規模の変更に止まらず編纂作業の質的  
な変化を余儀なくされる。たとえば原稿のチェックが字句の確認やその当否だけでなく文脈の検討にまで及び、関  
連する他の項目の記述内容に影響を及ぼす。ときには原稿内容の根本的な書き直しを必要とし、結果として編集の  
絶対時間が大きくなり、校正等複数の人手が必要とされる。労力の問題は資金の問題に直結する。日本で初めての  
本格的な仏教大辞典の編纂にどのくらいの資本を要するかについて、事前の計画が立て難かったのは当時としては  
無理もないことだった。資金が続かず、挫折はしたが、企画をなんとか引き繋ぐために金尾文淵堂は最大限の努力

を払ったのである。

### 『仏教大辞典』の構想と現実

計画から三〇年を経て実現した辞典の完成版は、当初計画とすっかり変わってしまったのだろうか。小辞典から一巻もの大辞典への変化は、明治四〇年二月の金尾文淵堂の詳しい広告によってわかる。「定価一五円、予約一時払い価格六円。体裁Ⅱ四六倍判六号活字三段千五百頁：付録 仏教大年表」などある。<sup>\*13</sup> また、刊行延期が新聞発表された後の明治四一年の広告では、体裁は同じだが分冊（本文四冊・索引一冊・年表一冊）であること、定価は一八円、予約金十二円と記している。<sup>\*14</sup> しかし、活字の組み体裁や、挿図点数一〇〇〇有余、項目選定の分類基準など編集方針の基本は変化していない。明治四二年に刊行し中絶した武揚堂版の本文や図版と実際に比較しても、またその二七年後の昭和一年に完成された辞典と比較しても最初の構想が基本的に生きていたことがわかる。

これが何を意味するかといえば、金尾文淵堂と望月信亨との間で検討された辞典の骨組みが、金尾が手を引いた後も忠実に実行されており、膨大な時間は集まった原稿の内容の充実に（校閲・加筆・修正など）ひたすら費やされたということである。ただし、昭和六年に完成版の第一巻が刊行されたときの「自序」では、金尾文淵堂について一言も言及されていない。その冒頭に、「仏教大辞典は明治四〇年始めて編纂に着手し、後幾くもなく書肆の不始末に由りて多大の辛酸を嘗め：（後略）」（傍点は筆者）と、書肆の不始末を指摘するのみであった。全巻が完結した昭和一年の版ではじめて金尾文淵堂との経緯について言及されたわけである。

金尾文淵堂に資金力がなかったことが第一の問題ではあるが、刊行の直前に編者が大幅に編集方針を変更し、規

模の拡大と刊行の延期を告げ、結果として出版者は窮地に追い込まれた。アメリカのような契約社会であれば法的に処理することもできたが、日本の出版者と著者の関係は慣習的にそうはならない。これは今も昔もほとんど変わらない。金尾種次郎は望月信亨の方針変更を認めたのである。理想的な仏教辞典を完成させるために無理な刊行をせず、時間と労力をかけるという決定は、その時点で小出版者の破産を意味した。

こういう経緯を振り返ると、金尾文淵堂と望月信亨との関係は単なる出版者と著者というに止まらない深さ、親密さを感じる。かれらはどこでどのように出会い、仏教辞典以外にどんな仕事をしたのか、はつきりとはわからないのだがいくつかの接点が浮かぶ。

#### 望月信亨との出会い——『法然上人全集』の刊行

望月信亨がはじめて文淵堂と出版の関わりを持ったのは、明治三十九年七月に刊行された「法然上人全集」全一巻の編集を通してである。望月信亨は明治二十一年、浄土宗が開いた浄土宗本校（東京・芝増上寺内）に第二回生として入学、成績は常に一番で俊英として期待された。二八年に同校を卒業し、京都に遊学した。そこで雑誌『宗粹』（明治二九〜三八、宗粹社）を発行し、三二年に東京小石川の浄土宗高等学院の教授を命じられ東京に移り住んだ。ところが三八年四月、突然望月は教授の職を依願免職となった。その理由は彼と京都の友人たちとで発行していた『宗粹』が浄土宗内の邪悪を一掃する主張を繰り返し、宗門当局を批判していたからだだったという。<sup>\*15</sup> 望月三六歳の時のことである。

突如として免職となり、浄土宗高等学院の教壇を降りた明治三八年、望月信亨に時間的な自由があるこの時期に、

金尾種次郎が訪ねてきた。「法然上人全集」の編集の依頼であった。当時法然の遺文はまだ十分に研究されておらず、正確な数すら不明で地方の諸寺にも散在すると伝えられ真偽もままならぬ状態だった。望月は小野玄妙ら優秀な学徒を助手にしてこの仕事に邁進した。この経緯は本全集の「跋」に詳しい。

金尾文淵堂の側から見ると、明治三八年は大阪から東京へ移転した直後で、意気盛んではあったが資金も乏しくまだ出版者として定まらない時期だった。金尾が望月に突然、企画を持ちかけたのかどうか、大阪時代から面識があったという確証はないが以前からお互いに知り合っていたと思われる。金尾種次郎自身、父の死後一七歳で仏教書中心の書肆を受け継いだわけで、家の宗旨は浄土宗（墓地は大阪天王寺下寺の善福寺）であり、京都に遊学して『宗粹』を編集していた望月を知らなかったはずがない。望月信亨が宗門学校の職を追われたことを知ったからこそ金尾は新たな仕事を持ちかけ、望月はそれを即座に引受け、短期間に集中して史料を博搜・校訂し、画期的な『法然上人全集』一卷を仕上げることでできた。本全集は金尾文淵堂（関東発売）と宗粹社（関西発売）の共同発行となっている。

また、同明治三九年一〇月には、金尾文淵堂から吉水智海著・望月信亨校『支那仏教史』が刊行された。この本は明治三七年に夭折した吉水の遺稿を、親友だった望月が金尾文淵堂に頼んで刊行したものである（序文は前田慧雲）。経緯を記した望月の序言によれば著者の吉水は『宗粹』の同人でもあった。本書は中国仏教史に関する日本での草分け的な研究書である。望月が関係する法然全集と中国仏教史の二冊を金尾文淵堂から同時に刊行したという事実は二人の関係の深さを示唆していると言えよう。これは文淵堂の仏教関連書の性格を知る上でも重要な点である。

## 金尾文淵堂と仏教史学

金尾文淵堂は元来仏教書肆だったが、家業を継いだ金尾種次郎は当初大阪で、文芸雑誌『ふた葉』を創刊し、薄田泣菫の『暮笛集』を刊行するなど文芸出版へと出版方針を転換する。金尾種次郎が仏教関連書を積極的に出版し始めるのは、東京へ移転した後の明治三九年以降のことである。金尾種次郎は熱心な仏教信者だったといわれているが、文淵堂からはキリスト教関係の書も数多く出版され、綱島梁川の『病間録』（明治三八）の成功がきっかけとなって宗教関係の出版が増加していった。やがて宗教関係書は金尾文淵堂出版物の一つの柱となる。

宗教書の内、仏教関連書は四〇点を越え、専門学術書から啓蒙的な本や子どものための「釈迦の生涯」なども含まれるが、概して専門書が多いのが特徴であろう。經典論・原論、仏教史、仏教美術、祖師伝、修養を説くもの、中国仏教に関する本も多い。その範囲はかなり幅広いが、著者の顔ぶれと出版物にはある傾向をみてとることができる。

金尾文淵堂が刊行した仏教書の著者たちはどのような人物だったのか。その一部を刊行書目年表からピックアップ<sup>\*16</sup>してみる（表参照）。この表は刊行年順ではなく同じ著者の作を並べたものである。この他に 新聞記者だった須藤光暉の教祖伝記シリーズ五冊（空海・法然・親鸞・蓮如・日蓮）や蜂屋賢喜代『仏天を仰いで』などがあるが、伝記や修養の書はここでは省いた。

左の表を見渡して、すぐにわかることは望月信亨関わった本や小野玄妙の本が目立つことである。また、浄土宗・法然関係および浄土真宗・親鸞関係の書の多さが眼につく。まず、『懺悔録』の著者、清沢満之（一八六三―一九〇三）はすでに明治三六年に没しているが、東本願寺（真宗大谷派）の僧で東京帝国大学に倫理学哲学を学び、明治

浄土教発達史論	橘恵勝
病間録	綱島梁川
支那仏教史	吉水智海著 望月信亨校定
懺悔録	清沢満之／暁烏敏他編
因果理法論	村上専精
仏教大綱	村上専精
法然上人全集	望月信亨・黒田真洞
大乘起信論之研究	望月信亨
浄土教之研究	望月信亨
聖徳太子御伝叢書	高楠順次郎、望月信亨編
聖徳太子三経御疏	望月信亨・高楠順次郎共編
法然と親鸞	木下尚江
円光大師（法然）	中島観琇
親鸞聖跡	安藤正純
仏教之美術及歴史	小野玄妙
大乘仏教芸術史の研究	小野玄妙
仏像概説	小野玄妙
仏教の美術と歴史	小野玄妙
然阿良忠上人伝の新研究	恵谷隆戒
略述浄土宗史	恵谷隆戒
日本禅宗史の研究	鷲尾順敬

金尾文淵堂発行の主な仏教関連書

二九年、京都白川村に「教界時言社」を開き宗門改革運動を起こす。機関誌『教界時言』で宗門批判の先鋒に立ち、翌三〇年には運動の責任を問われ除名処分となり、清沢は郷里の三河に帰るが彼に同調した学徒たちへの影響力は大きく、たとえば暁烏敏（一八七七―一九五四）らが集まり「精神主義」運動に没頭していく。その後清沢は除名を解かれ、東京へ招かれて本郷森川町の宿舍に落ち着く。「浩々洞」と名付けられたその宿舍に集まった暁烏や佐々木月樵、多田鼎らの青年たちは、清沢と共同生活を営みながら自己修養の求道的な運動を展開した。明治三四年には月刊誌『精神界』を創刊し運動の拠点とした。金尾文淵堂から出た本書は弟子の暁烏敏が清沢の没後三年に編集した遺稿集である。また浩々洞同人編著の『沈思録』も金尾文淵堂から刊行され（明治四〇）、浩々洞の編集による『清沢満之全集』全五巻を文淵堂から刊行する予定だったが、<sup>\*17</sup> 仏教辞典による破産で実現しなかった。

次に、『因果理法論』『仏教大綱』を著した

村上專精（一八五一～一九二八）も東本願寺の僧であつたが、学問としての仏教、ことに日本仏教史学の確立に寄与し、境野黄洋や鷺尾順敬、常盤大定ら多くの学者を育て、その影響力は諸方に広がった。彼はまた明治二八年ころから清沢満之らと東本願寺改革運動を起こし処分を受けた。また境野黄洋らの新仏教運動を支援した。

望月信亨については先述したとおりだが、彼も浄土宗の宗門批判を行ない一時教授職を罷免されたことを確認しておきたい。『聖徳太子三経御疏』などの共編者として望月とともに名を連ねる高楠順次郎（一八六六～一九四五）は西本願寺の文学寮に学び、禁酒禁煙の反省会運動に参加（『反省会雑誌』はのちの『中央公論』）、七年に及ぶ英国留学でインド哲学を学び帰国後東京帝大の教授となる。昭和二年に東大を退官後、渡辺海旭らと大正一二年から始めた大蔵経の刊行に本格的に取り組み、昭和九年に『大正新脩大蔵経』本巻・図像・目録全一〇〇巻を完結。望月信亨とは親友で『仏教大辞典』の執筆者の一人として陰ながらこれを支援し、昭和六年の完成版第一巻に序文を寄せている。

『仏教之美術及歴史』などを出版した小野玄妙（一八八三～一九三九）は、仏教美術史研究の草分け的存在で、大正大学に学び、望月信亨を助けて『仏教大辞典』『大日本仏教全書』の編集に従事、東洋大学などで教鞭を採りながら、『大正新脩大蔵経』の編集実務を担当、膨大な原史料にあたる校訂編纂作業を続けながら、自ら図像研究を軸に仏教美術史という学問分野を開拓した。

常盤大定（一八七〇～一九四五）は、宮城県の実宗大谷派の寺に生まれ、東京の大谷教校で村上專精の教えを受ける。帝国大学でも村上の門に出入りして指導を受け、同文科大学哲学科を卒業。その後長年東京帝大で教鞭をとりながら、その間五回にわたって中国の仏教遺跡を調査し、多くの旅の困難を克服しながら写真や資料を多数収集、

その詳細な報告は『支那仏教史跡』として金尾文淵堂から発行されている。

『日本禅宗史の研究』の著者鷲尾順敬（一八六八—一九四一）は、大阪の東本願寺派の寺に生まれ、京都で村上専精に出会い、その紹介で東京の哲学館に学んだ。その後も村上から教えを受けて仏教史研究にまい進する。仏教人名辞典として名高い『日本仏家人名辞書』の編纂を一人で成し遂げ、曹洞宗大学で仏教史を教え、東京帝国大学史料編纂官となり後進を広く育てた。『日本禅宗史の研究』の刊行は戦後、一九四五年になったが、生前の金尾文淵堂との交流の上に成ったものである。

このように金尾文淵堂に集まってきた初期の仏教研究者たちは、浄土宗系と真宗系（東本願寺と西本願寺）の僧が多く、浄土宗系の人脈は望月信亨を軸とし、真宗系は村上専精の影響力が大きいことがわかる。そしてこれらの著者たちは若い頃、既成の教団に対する批判の運動を経験している点も見逃せない。また多くが仏教学者となり、大部の書物の編纂に直接的に関わっていた。つまり、僧籍を持ち、研究者にして編集を経験している人物が中心だった。

仏教学や仏教史学は西洋の学問の範疇に照らせば、宗教学や歴史学の一分野で科学的に研究されるべき対象だが、日本の場合これらの学問は僧侶出身の人たちによって担われ、その基礎が築かれた。その方法はインド哲学がそうであるように一旦西洋を経由して得られたもので、日本から直接チベットに入り研究した河口慧海や、セイロンに渡った釈興然のような人物は仏教界や学界からは無視された。望月の仏教大辞典の編集再開もフランスで仏教辞典が計画されていることが刺激となってラストスパートがかけられた。<sup>\*19</sup>『望月仏教大辞典』をはじめ『大日本仏教全書』や『大正新脩大藏經』、『日本仏家人名辞典』など大正から昭和初期にかけて編纂された資料的価値の高い仏教

関係の出版と、金尾文淵堂との直接的な関係は一見無さそうだが、著者人脈の重なりから辿るとはつきりとその関連性が見えてくる。

### 信心と学問、信心と出版

金尾文淵堂にはかずかずのエピソードが残されているが、あまり知られていない一つの話がある。文淵堂の歴史の最後に属するが、昭和一九年、戦時を理由に政府の指令で出版社の整理統合が行われ、金尾文淵堂も他の一五社と合同することになった。父祖の業を継いで五〇年、ついに伝統ある社名が消えるに際し、金尾種次郎は文淵堂の出版に関係した物故者の追善菩提のために一〇月三日「一座の法会を厳修して聊か報恩の微意を表」そうとした。

大阪市外曾根萩の寺に遺族や有縁の人々四六名を招いて「参詣焼香を賜」ったという。<sup>\*20</sup> 昭和二〇年刊の鷲尾順敬著

『日本禅宗史の研究』の特装本巻末にその会の趣旨と当日の参加者名、そして「文淵堂関係後援物故者芳名」が印刷されている。そこに並んだ名前は法名と俗名合わせて三〇〇名にのぼる。法名で記されたものの大半は不明だが

「北原白秋命」、「白桜院鳳翔晶輝大姉」 〓 与謝野晶子、「清浄院玄譽浩々歌客心悦居士」 〓 角田浩々歌客らがおり、

俗名には伊上凡骨、泉鏡花、伊藤銀月、上田敏、内田（貢）魯庵、岡田三郎助、鹿子木孟郎、児玉花外、堺枯川、

正岡子規、徳富健次郎ら金尾文淵堂ゆかりの懐かしい人々が並ぶ。金尾種次郎がどのような気持ちでこの追善会を催したのか計り知れないが、少しのユーモアと抵抗と、多くのまじめな感謝と追善の気持ちを見るような気がする。

金尾自身は古いタイプの信心の人であった。広津和郎の回想記『年月のあしおと』（講談社文芸文庫）に、「金尾が夜十二時頃にならなければ家に帰らないのは、東京の何処かに出かけた時でも、最後には必ず浅草観音にお参り

して来るためである」とあり、また藤田福夫が『近代歌人の研究』で金尾種次郎について伊達俊光未亡人が語った話として「大阪時代の金尾がしばしば四天王寺や住吉神社に参詣拝し、その後は心がさっぱりするのを覚えたと言ったと伝えられ、また住吉神社境内の野良犬にわざわざ菓子を用意していくという慈悲心をもっていたとも話された」と紹介するような信仰<sup>\*21</sup>をもった人だった。与謝野晶子の死の床を見舞った彼自身の回想に「何しても今一度奇跡を御願ひせねばと、暫くの暇を見て、浅草の観世音へお詣りして、電話で「マダ大丈夫でせう」といふことを承りながらも、胸騒ぎに荻窪へ馳せ戻ると……」<sup>\*22</sup>とあるように、彼自身の信仰は理屈ではなく神仏に祈り願うことにあった。

金尾文淵堂が『仏教大辞典』に着手し、多くの仏教書の出版を再開したのは明治三〇年代後半からである。その頃ようやく「仏教」という言葉が宗教という意味概念をもって日本社会の中に浸透した、と指摘するのは仏教史学者の大隅和雄である。<sup>\*23</sup> そもそも江戸時代までは真言とか曹洞宗とか真宗とかの宗旨はあっても、「仏教＝宗教」という観念は庶民の間では通用していなかったというのである。明治維新政府の神道国教化による神仏分離と廃仏毀釈が仏教各宗派を混乱と動揺に陥れ、また欧化政策によって伸展するキリスト教との対抗上、各宗派は信心の世界に甘んじてはいられず、統一的な「仏教」の理論を打ち立てて自らをアイデンティファイしなければならなかった。

そのために彼らが選んだ方法は、第一に「仏教」の原理を求めて仏典の来た道を中国からインドへとたどり、インド哲学を学ぶ方法であり（南条文雄など）、第二は欧州へ留学して宗教学と宗教政策を学ぶ道であり（島地黙雷、赤松連城、井上円了など）、第三が日本仏教の歴史を書くこと、仏教史研究であった（村上专精など）。各宗派はこ

ぞって優秀な学僧を欧米へ派遣し、宗門教育機関の充実を図った。

明治三〇年代に入ると若い学僧たちは宗派を越えた交流をはじめ、既成の教団の腐敗ぶりを糾弾し革新運動を起し、言論活動のためにさまざまな雑誌を刊行した。明治三年の境野黄洋ら新仏教徒同志会の機関誌『新仏教』、また清沢満之と浩々洞の『精神界』、浄土宗でも望月信亨らの『宗粹』のちの『宗教界』などであり、その他この時代には近角常観の体験的信仰や綱島梁川の見神の体験、伊藤証信の無我愛など教団仏教にあきたらず不満に思う青年や知識人を巻き込んだ運動がおこった。

金尾種次郎がこれらの動きに無関心だったはずはない。それは綱島梁川『病間録』の刊行からもうかがえるし、同時代の社会主義者たちにも接近したように、宗教と社会の運動に関心を抱いていた。<sup>\*24</sup> 直接その運動や機関紙にコミットした形跡はないが、『仏教大辞典』の企画をはじめとして『懺悔録』などの思想書や仏教研究書の出版、つまり仏教が宗教としてあるいは学問として自立（近代化）する過程に立会い、仏教史学の誕生に出版者として一役買ったことは明らかである。しかし金尾種次郎自身が「新仏教」運動がいうような、人間の理性に裏打ちされた合理的な信仰の確立に共感したかどうかははなはだ疑問と言わねばならない。文淵堂の仏教書にはどのような時代的特徴を見出しうるのだろうか。

既に見てきたように明治後期から大正時代にかけて確立された仏教学や仏教史学は、僧侶出身の学者たちによって築かれた。それは「信仰」を抱えこんだ過渡的な「学」であり、やがて大学制度の進展にともなって「科学的・実証的」な学問が主流となると、僧侶が築いた学的蓄積に対してやや冷たい視線が向けられるようになり、この時代に出版された本や仕事は過去のものとして置いて行かれた。金尾文淵堂の仏教書もまた学術の世界からは無視さ

れいつしか消えていった。

しかし、この時期の仏教学や仏教史の刊行物には強力なエネルギーと熱意が感じられる。望月『仏教大辞典』付録の『大年表』もその一つであろう。先に述べたとおりこの年表は一ページを五分割して年ごとに縦割りし、横軸は日本・中国・インドほかの三段に分け、一年刻みで進行する基本構成をとる。インドの西暦紀元前五五五年から始まるので、もったいなくも最初の十数ページは中国の欄も日本の欄も真っ白のままである（明治四二年版。昭和一一年の第二版は最初の数十ページを七分割して七年表示）。記述の最初はインドの阿育王（アショカ王）の事績かと思いきや、釈迦の誕生から記されている。山中苦行の年も舍衛城の説法、涅槃も年表に記されている。これは聖徳太子の伝承から生涯の事績を年表化する精神とも一致している。記載事項には出典が示されるが、後世の経典や史伝の伝承記述をも採用して年表に写すわけだから、そこには歴史的事実と信仰・信心の「物語」要素が同居することになる。つまりこの年表にはこうしたある種の「幻想」が孕まれている。一方で詳細を極め、中世、近世、近代の日本の記述欄は数百ページにわたって細かい事実で埋め尽くされる（補遺編では本辞典が西暦一九三六年に完結したことも、望月信亨の死去も載っているし、第二次大戦後も日本欄の年号は皇紀で統一されている）。こうした伝承と事実、信心と科学の同居こそ明治三〇年代のロマン主義の表徴であり、大まじめな面白さと二度と編集されない貴重な史料性を獲得している。その熱意は「仏教」アイデンティティの確立への意思から生まれた。

年表の基本的な構成・組み体裁もみごとである。ページを上・中・下段を分ける横軸の三国欄は、それぞれの地域の時代による重要度に応じて伸縮し段差を生み出し、一ページを五年か七年に分けるので一年の幅も変化するが、その縦軸は一貫しているため、実に読みやすい形式を生み出している。こうした編集レイアウト上の工夫には、望

月信亨の考え方を実現しようとする編集者金尾種次郎のアイディアが生きていると思うのである。信仰と学問研究が渾然としていた時代の『仏教大辞典』、自らの信心を貫き、かつ学問への尊敬を失わなかった出版者金尾文淵堂がすべてを賭けた『仏教大辞典』は今も生きているのである。

## 注

\* 1 石上善応は、「仏教辞典総覧」（『名著通信』九号、一九七八年）で主な仏教辞典を挙げてその特徴を解説している。また、昭和初期に合い前後して仏教辞典が刊行されたことに言及して三宅雪嶺は、織田『仏教大辞典』の序文で次のように述べている。「仏教辞典の小なるは既に若干種の出版あり、其の大なるは一も完成せず、望月君の仏教大辞典の中絶は言はずもがな多額の費用を以てせる仏教大学編纂の仏教大辞彙さへ、一昨年三巻中の一巻の出でしのみ、而して滋に織田君の仏教大辞典の出で、あとの雁が先となる。（中略）本書出でて仏教界始めて大辞典あり。欧米人の辞典を問ふあれば、先づ是を以て答ふべし。仏教大学の仏教大辞彙も早晚完成すべく、之に較べて本書は簡に失すと見えんが、努めて冗語を廃する所、稍々素養あるものに便を与ふ。他日大辞彙の出ざる暁、仏教界に二種の大辞典あり、若し望月君が翻然悟り、中絶せるを継続せんか、更に一を加ふべし。是れ啻に仏教の面目なるのみにあらず、日本及東洋の文運に関係あり。」

\* 2 望月信亨編『仏教大辞典』全五巻 昭和十一年版 自序。戦後の全一〇巻本にもこの自序は載る。

\* 3 明治四〇年の金尾文淵堂の広告（『宗教界』裏表紙）には「爾来之が辞典の編纂に全力を傾注すること実に幾閱年」とあり、具体化したのはこの年としても、金尾が鈴木暢幸に持ちかけたのは明治三十九年よりもう少し前かもしれない。

\* 4 金尾文淵堂の他の出版物の製作費や借金の返済に予約金が充当された可能性も無いとはいえず、明治四〇年に出版点数がたいへん多く、積極的に出版活動を展開した理由がこの辺にあつたのかもしれない。

\* 5 読売新聞記事「仏教大辞典出来日」 明治四〇年八月二日、朝刊は以下のように伝える。

「望月信亨氏主幹となり金尾文淵堂より刊行の筈なる仏教大辞典は爾来計画益々膨大し、先に執筆せし専門大家

六十八名の稿の如きも予定の五倍以上に達するが如き有様にて去る三月以来更に二十余名の専門家を集め鋭意修正に従事しつつありしが、頃日漸く之が整理を了し既に大部分は某活版所にて印刷中の由なるが、発行の期は尚二三ヶ月を要す可しと云ふ」

\*6 仏教大辞典の違約を報じる『万朝報』明治四〇年一〇月七日の記事。

「京橋区五郎兵衛町書肆金尾文淵堂が、仏教大辞典の予約募集を発表せしは、昨年一二月と本年一月との両度にて、之を信用して申し込みたる者甚だ多く、今日までに払い込み済となった予約金は一万九千円に上れりとは、同店の内幕をよく知った人の話なり。へ中略」

「茲に少しく文淵堂が、目下の窮状を語らんに、△負債の総額は約六万円に達したりと聞くが、其の中の主たるものは左の如し、△金九千円国光社、△金一万円大阪杉本書店、△金六千円前川文栄閣、△金四千円田原洋紙店、△金三千円植木製本所、△金千五百円弘報堂、△金千五百円京華社、△金三百円秀英舎、△金百円伊藤銀行、△金一万九千円仏教大辞典予約金へ後略」

\*7 倒産の時期は正確にわからないが、明治四一年一月の『早稲田文学』の巻末自社広告の「謹告」で「本堂出版事業の蹉跎に因り惹きて仏教大辞典の事業も亦暫く中絶せざるを得ざるの否運に陥り居候処這回債務整理の光明に浴」して出版営業が出来るようになったとあり、また明治四一年七月の『法然上人全集』第三版巻末広告に文淵堂から発行とあるので、倒産はその後、八月以降と思われる。

\*8 小島棟吉（一八六六—一九五一）は明治三十一年に陸軍関係の地図の売捌および軍用図書を出版する武揚堂を創業した。武揚堂は現在も地図出版の老舗として出版を続けている。

\*9 『大日本仏教全書』には稀覯本が多く収載されている。『覚禪鈔』『十卷抄』などの図像本の他、古代朝鮮仏教を知る『海東高僧伝』、『本朝高僧伝』以下数多くの「高僧伝」や、『僧綱補任』、室町時代末期の類書『塵添璫裏抄』、『聖徳太子私記』、関東大震災で原本を焼失した『蔭涼軒日録』など当時にあつては参照しにくいものを翻刻した意義は大きかった。

\*10 金山正好「近代高僧素描」『日本仏教史学』一九八一年二号

\*11 金山前掲注10

- \* 12 拙稿「金尾文淵堂をめぐる人々（三）——東京時代の店員たち」『比較文化論叢』11（札幌大学文化学部、二〇〇三年）
- \* 13 『仏教大辞典』の広告（明治四〇年二月の雑誌『宗教界』三卷二号掲載）は、辞典の経緯と主な執筆者、協力者を次のように謳う。「曩に望月、萩原、鈴木、加藤の四先生に懇嘱し、爾来之が辞典の編纂に全力を傾注すること実に幾閱年、今や粗々其の完成を告げんとするに至れり加ふるに南条、村上、前田、高楠の四博士並驚尾順敬、山田孝道、釈慶淳、河野法雲、常盤大定、塚原周峯、上杉文秀等の諸大家は各専門の研究について執筆若くは懇篤なる援助を与へられ特に建築美術の事項に関しては工学博士伊藤忠太、大村西崖等諸先生の指教を受けること少からず（後略）」
- \* 14 『法然上人全集』（金尾文淵堂）第三版の巻末に載る「仏教大辞典」の広告、明治四一年七月
- \* 15 金山前掲注10、および常光浩然『明治の仏教者』上・下（春秋社、一九六九年）
- \* 16 拙稿「金尾文淵堂をめぐる人々（二）——画家たちと出版者」『比較文化論叢』10（札幌大学文化学部、二〇〇二年）参照
- \* 17 『思軒全集』第一卷（金尾文淵堂、明治四〇年）の巻末に全集の自社広告が載る。『清沢満之全集』は後に法蔵館で刊行されたが、二〇〇三年に岩波書店からも刊行開始された。
- \* 18 拙稿「『鎌倉新仏教』という名辞」では鎌倉新仏教という概念が教科書等で一般化する時期と、概念の形成が仏教史学の成立に関わっていたことを論じた。中でも村上專精の仕事の影響力の大きさを指摘。高木豊編『鎌倉仏教の様相』所収（吉川弘文館、一九九九年）
- \* 19 啓明会理事長大久保利武の序文には「今や仏教は泰西諸国に於ても頻に研究せられ仏語訳の仏教辞典も編纂せられつつありと聞く。本辞典は必ずやこれ等の外語訳仏教辞典の参考となり」とあり、望月の仏教辞典を刊行しなければならぬ理由の一つに外国での仏教辞典に対抗する意図があったことがわかる。
- \* 20 金尾種次郎の息女金尾静子氏の談によれば、昭和二〇年、二十一年にも所を変えて自宅のあった京都円町のだるま寺（法輪寺）で同様の法事を営んだという（筆者の聞き書きによる）。
- \* 21 藤田福夫『近代歌人の研究』（笠間書院、一九八三年）

\*22 金尾種次郎「晶子婦人と源氏物語」『読者と文献』二卷八号 昭和一七年

\*23 大隅は『信心の世界、遁世者の心』（『日本の中世』2、中央公論社、二〇〇二年）で、仏教という言葉が釈迦が開いた宗教という意味で用いられるようになるのは、明治も三〇年代であると述べ、日本仏教史がはじめて叙述された時のとらえ方が、「宗教改革」論など西洋近代の思想に強く影響されていることを指摘する。

\*24 拙稿前掲注12

#### \*参考文献

吉田久一『日本の近代社会と仏教』（評論社、一九七〇年）

小室裕充『近代仏教史研究』（同朋舎出版、一九八七年）

日本仏教研究会編『日本の仏教』4近世・近代と仏教（法蔵館、一九九五年）

池田英俊ほか編『現代日本と仏教』2巻「国家と仏教」（平凡社、二〇〇〇年）

小野玄妙『日本之美術及歴史』（金尾文淵堂、一九一四年）

小野玄妙『日本の美術と歴史』（金尾文淵堂、一九三七年）

村上専精『仏教大綱』（金尾文淵堂、一九一四年）

望月信亨編『法然上人全集』（金尾文淵堂、一九〇六年）

望月信亨・高楠順次郎編『聖徳太子御叢書』（金尾文淵堂、一九四二年）

清沢満之『懺悔録』（金尾文淵堂、一九〇六年）

吉田久一『清沢満之』（吉川弘文館、一九六一年）

今村仁司『清沢満之の思想』（人文書院、二〇〇三年）

鷲尾順敬『日本禅宗史の研究』（金尾文淵堂、一九四五年）

※本稿は平成一五年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。